

〈論文〉

東日本大震災後の「震災婚」という社会現象

～聞き取り調査の分析を中心に～

増田 榮美

序 章

本稿は、東日本大震災（以下、震災）後の社会現象のひとつとして取り沙汰された「震災婚」（絆婚）¹⁾ について、一人の女性からの聞き取り調査を中心に分析したものである。

2011年3月11日午後2時46分、未曾有の大災害が東日本を襲った。死者、行方不明者はおよそ2万3千人を超え、東北地方のみならず北海道や首都圏にも甚大な被害をもたらした。マグニチュード9.0という稀にみる巨大地震であるだけでなく、それにより所によって20メートルを超える巨大津波や福島第一原子力発電所事故がもたらされるなど、被災地の市民生活を大きく揺るがした。さらに被災地だけにとどまらず、リアルな津波被害の映像を繰り返し視聴したことによるPTSD（心的外傷後ストレス障害）の発症、計画停電、放射線物質の放出など、日本に暮らす全ての人々にとっても物心両面で大きな影響をもたらす結果となった。

このような状況の中、震災後のゴールデンウィークを境に、結婚するために相手を探す活動、いわゆる「婚活」²⁾ が盛んになっているとの報道が多く見受けられるようになった。結婚情報サービス大手、株式会社ツヴァイ会長の田路正氏によると、震災直後から4月までの新規入会者数は前年割れしていたが、ゴールデンウィークを境に風向きが変化、その後は2ケタ増が続いており9月は20%を超えた、としている（日経流通新聞 2011年9月21日付）。さらに、結婚をするつもりがなかった独身男女が、未曾有の災害を機に結婚を決意したという話題も多くなった。恋愛以上の安心が欲しい、将来への不安、などが理由で、今の若者には何かがあっても最終的に頼れるのは

自分か家族だけ、という意識があり、「生活防衛」のために結婚するという側面が強いという（日本経済新聞 2011年5月17日夕刊）。

未婚化が進む日本において、今まで結婚を考えなかった男女がなぜ結婚を決意したのか。震災以前と結婚観にどのような変化が見られたのか。結婚式についての考え方はどうなのか。

メディアでは一括りに「絆婚」と名付けられていたが、絆の他に重要なキーワードがあるのではないか。同じ絆婚でもカップルによって含まれている意味は全く違うはずである。

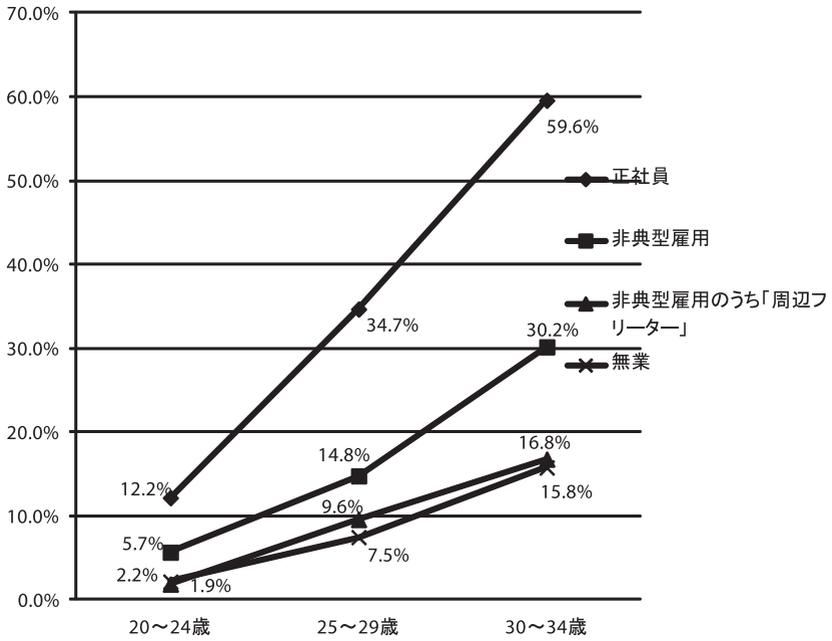
本稿では、まず日本の未婚化の現状を捉え、震災婚を経験した1人の女性に聞き取り調査を実施し、そこからキーワードを探りたいと考えている。

1 未婚化の状況

昨今、年々未婚化が進み、晩婚化とともに少子化の要因として大きな社会問題のひとつとなっている。2013年2月に内閣府が発表した「未婚男性の結婚と家族形成に関する意識について 非正社員に焦点を当てた実証分析」によると、未婚率は、男女ともに上昇傾向にあるが、特に、男性の未婚率の上昇が著しく、2010年時点で、30～34歳層で47.3%（女性は34.5%）、35～39歳層で35.6%（同23.1%）に達している。また、男性については、生涯未婚率³⁾の上昇も著しく、2010年で20.1%と過去30年間で約8倍に上昇している（女性は10.6%）。

男性の生涯未婚率の上昇は深刻化しているが、1990年代半ばから若年層で正社員・正規職員でない労働者（以下「非正社員」）が急速に増加してきたことが一因になっているという見方がある。男性の未婚者が急増している背景には、いわゆるワーキングプアと呼ばれる非正社員の増大など、経済の長期的な低迷に伴う雇用の不安定化や低所得化などがあると考えられる。非正社員(非典型雇用者)の有配偶率は低く、30～34歳の男性においては、非正社員の人の有配偶率は正社員の人の半分程度となっているなど、就労形態の違いにより家庭を持てる割合が大きく異なっていることが窺える（図1-1）。

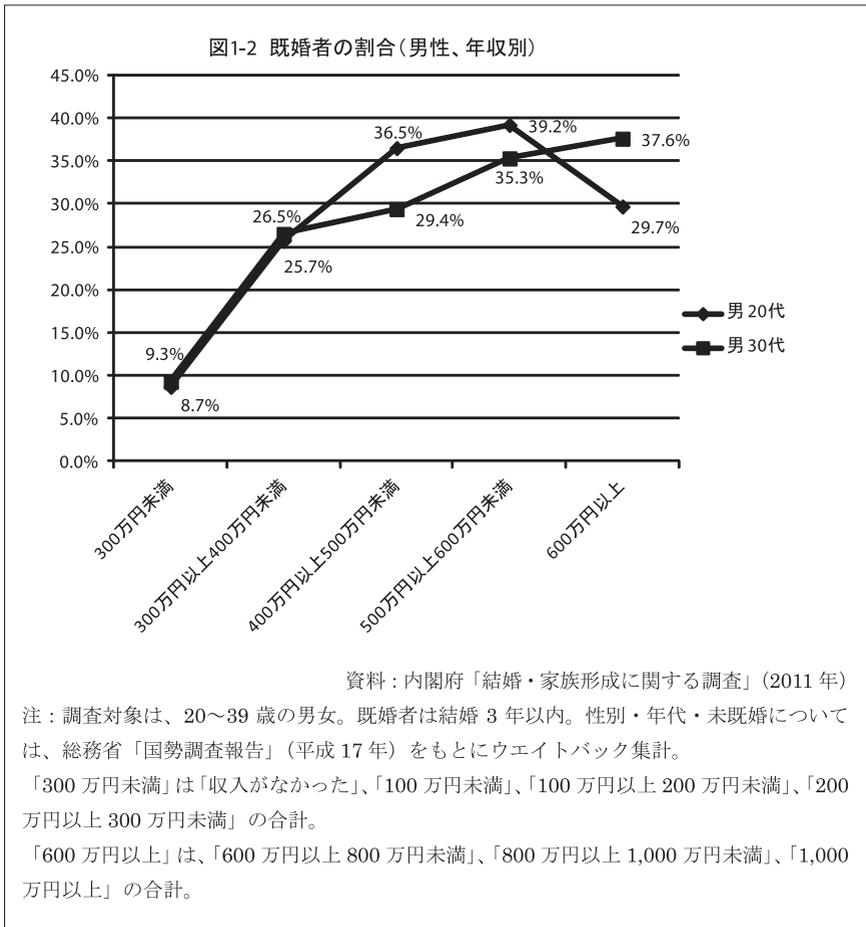
図1-1 就労形態別配偶者のいる割合(男性)



資料 内閣府「結婚・家族形成に関する調査」(2011年)

また、内閣府が実施した「結婚・家族形成に関する調査」(2011年)によると、既婚者(結婚3年以内)の割合を年収別に20代、30代の男性についてみると、年収300万円未満では8～10%である一方、300万円以上の各階層は25～40%となっており、300万円を境に大きな差がみられる(図1-2)。

このように、未婚化や晩婚化という社会現象は就業形態が不安定、所得水準が低いなど、経済的事情が影響を及ぼしていることを示唆している。



2 先行研究

女性の晩婚化や非婚化現象を説明しようという経済学的仮説については枚挙にいとまがない。愛情面等人々の価値観に変化がなくても時代の変遷とともに結婚の便益が下がり、結婚の必要性が弱まったことで晩婚化が進展しているとするものや、結婚に伴う費用の上昇により晩婚化や非婚化現象を説明できるとしているもの（樋口・阿部1999：p34）、また、昨今では親もとに寄生する未婚の子供、いわゆる「パラサイトシングル」が指摘され、晩婚化・非婚化を進行させているという学説（山田 2000）など、数多く見うけられる（増田2010「軽井沢におけるリゾートウェディング市場の成立と展開」）。一方で男性の晩婚化や非婚化現象については、家族社会学でも様々な研究がなされている。山田はこのような現象について、1973年のオイルショック以降、結婚意識の多様化により、結婚を遅らせ、結婚をしない傾向が強くなっていることが影響しているとしている（山田 1996）。家族社会学における家族論に特徴的な点は、離婚率の上昇、晩婚化、非婚化、共働き夫婦の増加、夫婦別姓や事実婚（非法律婚）の増加などの諸現象を、「危機」や「問題」としてではなく、「多様化」「脱制度化」とみる解釈の増加である（宮坂1997：115）。

結婚にまつわる諸現象について、山田は「結婚の社会学」の中で、結婚意識の多様化により、結婚を遅らせたり、しない傾向が強まったりしたとし、その理由として、社会が豊かになり、女性が職業をもつことが一般的となり、家事の省力化・外部化が進んだことにより、結婚しなくても生活できる条件が整ったことをあげている。

一方で岩澤・三田（2005）は、1970年代以降30年間の日本の未婚化について、結婚相手との出会いの場という観点からアプローチし、見合い結婚や職場を通じた結婚の減少によって説明できるところが大きいとしている。

震災後の結婚や結婚生活についての研究は、アンケートによる調査分析が中心である。2011年4月に電通総研がインターネットで行った「震災一カ月後の生活者意識」に関する調査では、震災により生活意識や行動にどのような変化が表れているかアンケート調査を行って検証している。本当に大事な人と笑顔で暮らしたいという「家族回帰」の傾向が強まっているとしているが、結婚や結婚生活に結びつけた分析には至っていない。

リクルートブライダル総研が行った「結婚総合意識調査2011」や「夫婦関係調査2012」は、震災後の結婚や結婚生活についてアンケートを実施し分析している。未婚者と既婚者、男女間の震災後の結婚や結婚式に対する考え方の違いを明確にしておき、震災婚を決意した要因を論じる上で参考になるものである。これらの分析を踏まえ、本研究では震災後、結婚に至るまでの過程を明らかにする。

また、白河は『震災婚』で、震災をきっかけに変化したものについて、愛、婚活、消費、ライフスタイルの変化を通して検証している。震災がきっかけで結婚を決意する震災婚について論じているものは他に類がなく、その点で震災婚に至るまでの過程を明らかにする上で参考になるが、被災地での調査がなされていない⁴⁾。本研究は被災地の女性への聞き取り調査を基に分析しており、さらに震災後2年が経過した時点での調査分析を行っていることによって、新たな知見を加えることも可能になると考えられる。

3 絆婚の事例調査・分析

昨今の日本における未婚化は、前述の通り年々深刻になっており、2008年に発表された「日本の世帯数の将来推計」によると、このままの状態では推移すれば、生涯未婚率は2030年に男性が30%、女性は23%に達する見込みだとしている。

ところが、震災後、これまで結婚を考えていなかった人が結婚を決意したり、相手を求めて婚活したりしている人が増加する傾向が見られた。未曾有の大震災を経験したことで、恋人という不安定な関係ではなく、より安定した関係である家族になることを求めたり、将来の不安から結婚相手を探すようになったという。電通総研が2011年4月11日～12日にインターネットで行った「震災一カ月後の生活者意識」に関する調査を基にして分析した『『日本新生』を支える『意識・ライフスタイル・社会システム』の変化予測』によると、「家族の絆や身近な人々との絆を今まで以上に重要にしようと思う」と答えた人の割合は女性が72%、男性が56%だった。男女間で多少の温度差があるものの、本当に大事な人と笑顔で暮らしたいという「家族回帰」の傾向が強まっていると電通総研は分析している（日本経済新聞 2011年5月17日 夕刊）。

配偶者がいる安心感や生活の安定を求めるのは、震災直後の心理的影響によるもの

であるとの見方が多いが、震災から2年が経過した現在はどのようなのであろうか。

福島県郡山市で被災し、震災2年後の2013年4月に結婚式を挙げる女性H氏に聞き取り調査を行った結果、震災後、交際相手の言動が影響を及ぼして結婚観や家族観に変化が見られ、それが交際相手との関係に有意に働き結婚に踏み切ることにつながったことがわかった。

H氏はブライダル業界で仕事をしている29歳の女性で、約8年交際している男性からプロポーズされていたが、結婚する気になれず先送りしていた時に被災した。

表3-1は、2013年3月に行った聞き取り調査のデータをコーディングし、そこから導き出されたカテゴリを表にまとめたものである。

表3-1 カテゴリ表

(1) 震災前の自分

H氏は物心ついた時より金銭に対する執着心が強く、「小さい時から働くのが好きで、稼ぐのが好きでした……大学行くより早めに社会に出て、昼間事務員をやって、夜からキャバクラで働いたら稼げるから、みたいな。高校の授業中もずっと計算していました」という言葉からわかるように、仕事は稼ぐためにするもので、お金が全てであるという考え方を持っていた。そして「私稼ぎたいし、仕事したいし、郡山だと給料低いし、自分がキャリアを積むという仕事が郡山にはないから東京に行きたい」とか、「自分で頑張って稼いで、

カテゴリ	コード
震災前の自分	他人からの印象
	キャリアウーマン志向 ~仕事観~
	玉の輿 ~結婚観~
	彼に対する低評価
	「なし婚」希望 ~結婚式観~
震災後の自分	「嫁入り」に違和感
	穏やかになった自分
	過信していた自分を認識
	仕事の取り組み方の変化
	仕事はライフワーク
	結婚で得られた安心感
	大事な人と共に過ごす重要性
	彼との信頼関係
両親のための結婚式	
自分に変化をもたらした要因	家族を大切に思う気持ち
	震災時の彼の対応
	有事に頼れる存在
	極限状態で見えた本質
	絆より信頼関係
震災後の社会現象	震災後の彼の变化
	震災後の婚活ブーム
	結婚生活に与えた影響
	震災離婚
結婚式に思うこと	高額な結婚式
	結婚情報誌への期待
	「なし婚」は経済的理由

稼いだお金で旅行に行ったり、ほしい物を自分で買ったりとか、親が病気をしているので、キャリアを積みば積むほど給料も上がるから、親だけに何かをするのではなくて稼げば稼ぐほど自分への奉仕もできるようになるみたいな感じでキャリアウーマンを目指してました」と言っていることから、より高収入の職業を得たいという思いから、キャリアウーマン志向に繋がったと言える。

そのため、他人からの印象は「すごいトゲトゲしくて、なおかつすごいピリピリしているみたいな」感じで、田舎に埋もれたくないという思いから、「どこで何をしているのかわからないし、土日は基本的に行方不明だったりする」くらい遊び歩いていたようである。

震災の1年前、6年間交際中の彼からプロポーズされていたが、はっきりとした返事をしないまま止め処なく交際を続けていた。「プロポーズされていたんですけども、延ばし延ばしにしている、しまいには私は東京に行くと言い出して、出来れば東京に行って稼げるようになったら多分面白くて帰れなくなるから、そのタイミングでお断りすればいいんじゃないかと、多分その頃私は好きな人が出来ていると思うし、みたいな感じで」という言葉からも、田舎での結婚よりも東京で一旗挙げて稼ぎたい、という気持ちが強かったことが窺える。実際に、2011年6月に勤務先の契約期間が終了するのに伴い、震災二カ月前（2011年1月）から東京を中心に就職活動を行い内定を得ている。さらに、「ブランドが好きなんです。だから、欲しい時にそういうプレゼントをしてくれる男の人が良いというすごい憧れがあった……稼ぐのが好きで、大人になったら自分のお金でしたいことをして遊んで、すごく格好良くてしっかりしている人を旦那にもらって安泰な生活をするんだ、みたいな。したいことをさせてもらうんだみたいに。来週ちょっとハワイに一週間ぐらい行って来ます、と言って、いいよと言ってもらえるような、玉の輿をゲットするんだ」と思っていたようで、このことからキャリアウーマン志向の先には玉の輿願望という結婚観が窺える。さらに、「元々結婚する気もないし、結婚しなくても生きていけると思ったし……子どもだけいればいいと思っていたし、結婚してひとりの男性にずっと落ちていて何十年も奥さんとして生きていくのが信じられない」と話していることから、妥協して生活レベルを下げたりしてまで結婚することはないという結婚観も窺える。

結婚式に関しては、「ドレスに何十万掛けなければいけない、それだったら二人で旅行に出かけたり」したいと、結婚式費用を無駄だと感じているようで、「お姫様になりたいなんて全然なくて、……結婚式の願望はそんなにない」、「何で人前でお姫様ごっこをしなければいけないんだよ、みたいな」と話しており、結婚をしても挙式や披露宴を行わない、いわゆる「なし婚」希望であった。「結婚式をすることによって、H家の嫁です、というのをいろんな人たちに挨拶するわけじゃないですか。面倒くさくて。別にH家に嫁になるために来たわけではなくて、旦那さんと一緒にいるためだけに結婚するので」と、結婚式では、嫁として結婚相手の家族や親族への挨拶や立ち居振る舞いを要求されるため、それが煩わしいと考えており、「昔みたいな嫁入りという感覚がない」と言っていることからわかるように、なし婚という結婚式観の先には、結婚は家と家の繋がりではなく、個人と個人の結びつきであるという家族観が窺える。

(2) 震災後の自分

プロポーズを保留にしたまま東京で就職活動を行い、その結果内定を取りつけたが、その直後被災した。前職の契約が終了する6月直後から東京の企業で働き始める予定であったが、被災状況など事情を説明して就職時期を遅らせてもらった。被災するまでは、早く東京に行き、いかに上手に婚約破棄するかと考えていたが、「いかに遠距離だったとしても子育てが出来るようになるかだとか、週に1回帰って子どもがもしも出来たら誰に育てさせようかとか、子どもを福島に置いて自分の親に面倒を見て貰って、週末だけ帰るようにしようかなとか、そういうふうに変化が違って」、本当にこのまま行ってしまっているのかと思うようになり、三カ月間、地元郡山での就職活動を行った。しかし、残念ながら仕事が見つからず、一度東京に就職したのだが、一カ月で郡山に戻って来てしまった。

地震直後、彼の思いやりや頼りがいに安心感を覚えたことが忘れられず、また彼の知られざる一面を垣間見ることができたことで有事での頼りがいを感じて結婚を決意したという。「やっぱり一緒にいた方がいいのではないかという感覚になってそこから初めて、お金ではないのかもしれないと思うようになって、郡山に戻ってからすぐ

籍を入れて……」という言葉から、未曾有の大地震に直面した結果、金品よりも大事な人と一緒に生活していくことの重要性を感じ、結婚観に変化をもたらしたことが窺える。

H氏は「震災で相手の本質を知ることができたというか、気付かない一面を……いざという時に頼れるなどか、何かあった時には私にできないことはこの人が全部やってくれるだろうな、みたいなのがあって、私の中では絆というか、信頼関係が深まった」と話しており、震災前、結婚は物や金で満たされていればいいという考え方であったが、信頼関係が深まったことが結婚の意思を固めることになった。

東京で仕事をした一カ月間で、「この仕事って私じゃなくてもできるんじゃない、代わりが沢山いる、それをわざわざ福島から来てやる仕事ではない」と感じたことも帰郷する決心を後押しした。自分を必要としている、大切に思ってくれているところに身を置きたいと考えていることがわかる。また、誰にでもできる仕事をしていることにより、自分の仕事力を過信していたことにも気付いたといえるであろう。

震災は、結婚観や仕事観のみならず家族観にも変化をもたらした。震災前は「結婚して一人の男性に落ち着いて何十年も奥さんとして生きていくのが信じられなかった」が、「震災後少しずつ変わって行って、やっぱり一緒にいようとか、一緒にいることによって落ち着くし何かあっても大丈夫だ、焦っても大丈夫、大丈夫みたいなふうに彼が思わせてくれる」ようになったという。「嫁なのだから、とかそういうのは関係ないのかな」と思えるようになり、新しく家族となる義父母との関係を煩わしいと感じるよりも、彼と一緒にいることが最も大切で、それが結婚の最大の目的であると気付き、新しい家族観の醸成に繋がった。

震災直後、停電や建物の倒壊等で交通機関が麻痺し電話が繋がらない状況の中、彼はH氏の病気の両親を心配して一生懸命安否の確認をしてくれていた。H氏が「自分の両親をそうやって心配してくれている人だから、義理の両親のことも自分の親のように考えられるんですかね」と話していることから、彼のその行動が、H氏の気持ちを大きく動かし家族観の変化につながったことがわかる。

郡山に戻って入籍をしたが、結婚式は挙げていない。前述の通り、結婚式に高額の費用を投入することに違和感があり、それは震災後も変わっていない。しかし、震災

後嫁入りに対する抵抗感が薄れたことと、母親のたっでの希望で結婚式を挙げることにした。「自分の母親が自分の結婚式を挙げていないから、ウェディングドレスを着てほしいというのがあって」や、「両親のためにというのがいちばんで、それもやっぱり震災で……。地震とかがなかったら、本当に面倒臭いし、もういいよみたいな」、「お父さんお母さんが喜んでくれる姿を見られればそれでいいですね」などという発言から、自分のためではなく、両親のために結婚式を挙げる決心をしたことがわかる。

震災前は、キャリアウーマン志向で、H氏いわく「トゲトゲしい感じ」であったが、「自分で雰囲気丸くなったと感じます。彼もそれは感じています」と言っているように、周囲の人、特に家族に対する優しい気持ちが生まれたという。「震災があったから、より大事にしようという気持ちが生れたり、お父さんのためにとか、お母さんのためにと思えるようになった」とか、「彼は義理のお母さんの子なので、やっぱりお義母さんに失礼なのでご飯だけは作るようにしています。ちゃんと食べさせていればお義母さんは心配しないだろうって。そういう考え方ってやっぱり変わりましたね」などと話していることから、家族を大切に思う気持ちが芽生えたことが窺える。

その結果、結婚後は相手に対する思いやりや優しさにつながり、気持ちに余裕が生まれ仕事にも好影響を及ぼしている。「共働きなので時間的にはゆとりはなくなりましたが、逆に仕事に対するゆとりが生まれました。営業で数字が足りなくてもガツガツしないですね、今は。不思議ですが気持ちにゆとりが生まれたんです。ガツガツしなくても達成するために働いているんですよね」と話しており、稼ぐために焦っていた以前に比べて、結婚の安心感から不安がなく落ち着いて仕事の段取りが組めるようになったことで余裕が生まれた。「一旦落ち着いて結婚して、やっぱり専業主婦が合わないというのもわかって、トゲがすごい落ちていってという感じです。自分を受け入れるようになったというか、多分見た目がトゲトゲしいから、話し方を気を付けようとか、そういう意識を自然にできるようになった」ということで、仕事がライフワークであることは変わらないものの、それをサポートしてくれる理解ある伴侶に巡り合えたことを幸せに思っていることがわかった。

(3) 自分に変化をもたらした要因

震災により、仕事観や結婚観、家族観までもが変化したわけだが、その大きな要因

は震災当時婚約者であった彼の言動であった。極限状態で見えた彼の人間性がH氏の考え方を変えたといえる。

震災前、彼に対しては「頼りないし、何考えているかわからないし、マイペースだし……貯金がないとかあり得ないのに貯金もないし、そんなのふざけるんじゃない」と思っていた。しかし、震災当日の深夜にようやく連絡が取れた際、その間一生懸命自分の両親の安否確認をしてくれていたことを知り、「一応まだ他人である自分の親を、他人だけれど本当の親のように思ってくれているんだなと思ったときに、この人は何かあった時に頼れる人だ」と感じたという。

「普段は全然頼りないんですけど、何かあった時がやっぱりいちばん大事なんですよ。優しい人なんです」と、彼が有事に頼れる存在であることがわかったことで結婚観が変化し、それが結婚の決め手になった。

未曾有の大震災という非常事態でありながら、彼は自身のことよりH氏やその両親の心配をしてくれた。「人間は何か、極限の状態になった時に本性が見える」と話しており、震災を経験したことで、共に生活していく上で大切な有事での冷静な対応や、自分と家族をいちばん大切に思い心配してくれている優しさを彼の中に発見することができた。

震災直後だけでなく、震災から2年が経過した現在でも彼の対応は変わらない。「今でも余震があると、その時いちばんに親に連絡してくれるというのは変わらないですね。私より先に親に連絡して、大丈夫だったら無事だよってメール送ってくれる」という。また、地震や洪水など、災害時には晩酌せず、いつ何があっても迎えに行かれるように準備しているそうで、H氏は「震災後しっかりした」と話している。

(4) 震災後の社会現象

震災後の社会現象として、未婚で交際相手がいない人の婚活が盛んになったり、交際中の男女が絆を再認識して結婚に踏み切る震災婚(絆婚)や、一方、震災という非常事態に直面した結果、価値観の違いが表面化するなどして離婚に至る、いわゆる「震災離婚」などが挙げられる。

H氏の周囲には、震災婚をした人は少ないが、災害時に一人でいた場合、不安で寂しさを強く感じる事が容易に想像できるため、その行動は理解できるとしている。

また、自分とその家族を心配してくれる人が他にいることが心強いと感ずることもわかるという。白河は『『婚活』時代』で、「永過ぎた春を終わらせるのは、女性の努力と天災しかない」と、交際期間が長すぎて結婚に踏み切れないでいるカップルを結婚に導くきっかけについて指摘している（白河 2008）。しかし、震災直後、交際相手の対応に感動して結婚の意思が強くなった人も、年月が経過していくにつれて気持ちが薄れ、冷静になって考えた結果、結婚に至らなかった人も多いという。H氏は「本当は結婚するつもりはなかったけど、震災がきっかけですごく結婚したいみたいな子が多かったんですけど、1年以上経って冷静になって元に戻った子が多いです」と話している。

震災当時交際相手がいなかった人の婚活については、やはり震災時の恐怖や不安から解放されたい気持ちから結婚相手を探したいと考えている人が多かったようである。「一時期は本当にもう私一人であるのが不安だから婚活しようとか盛り上がっていた人が、だんだん冷静になってきて、結局はしないという選択をしている人が増えていくってことです、焦っても駄目だねみたいなの」と話していることから、この場合も、時間の経過とともに冷静さを取り戻した結果、婚活熱が冷めてしまった人が多いことがわかる。

震災がきっかけで離婚に至った人は、阪神淡路大震災の時にも増加したことが知られており、東日本大震災でも増加の可能性が指摘されていた（日経流通新聞 2011年6月22日付）。H氏の知人の中にも、震災が結婚生活に影響を及ぼし、別居状態に至っている人がいるという。震災当時は新婚で東京に住んでおり、妻は妊娠中だった。妻は仙台在住の祖父が津波で流されたことがきっかけで、精神状態が不安定になってしまった。無事に出産したものの、夫が仙台に転勤になったのを機に、実家に戻りたいと切り出され別居しているという。2011年を象徴する文字として選ばれ、震災復興のキーワードともなった絆だが、夫婦間ではなく、実家の家族との絆を再認識してしまった結果、夫婦間に溝ができ、離婚の危機に至っている。

H氏のように、震災がきっかけで結婚まで至り、公私ともに充実した生活を手に入れた人は、絆を再認識するだけでなく、震災直後だけではない持続的な相手への思いやりや優しさ、頼りがいといった共に生活する上で必要とされる共通の価値観を見出

しており、これは互いに信頼関係を構築することが重要であることを示唆している。

(5) 結婚式に思うこと

前述の通り、震災後H氏は仕事観や結婚観、家族観などの変化が見られたが、結婚式に対する根本的な考え方は変わっていない。結婚式は「お姫様ごっこ」で、そのようなことに高額な費用を掛けることに対しての不満を感じている。両親のためと思えばこそ、実施する決心をしたが、結婚式費用の高額化への不満は拭えない。結婚式を挙げずに入籍だけをする「なし婚」は、経済的負担が大きいからだとH氏は指摘する。「未婚化とか少子化とか言われてるじゃないですか、だったら、結婚式の費用を補助してくれるような取り組みをしてもいいのになと思います。そしたら結婚式挙げてなかった人たちも挙げたと思います。親が結婚式費用を負担してくれない人達が挙げないんだと思うんです」と話している。さらに「不安があるんですよね、ここでこんなにお金を遣ってしまうことに」と言っており、将来への経済的不安が結婚式の高額な費用への拒否反応につながることがわかった。

H氏の友人にもなし婚は多いという。「結婚式って、お金がないから挙げられないとは言いにくい、お友達には。子供ができたし、結婚式はまだまだ先かな、とか濁しちゃうけど」という言葉から、経済的理由で結婚式を挙げないことはプライドに傷がつくようなイメージを持っていることがわかる。それは「結婚資金を借りたいという相談をする相手がない。借りてまで結婚式するの、って思うかもしれないし、思われるのも嫌だし。親が負担してくれないの、って言われるのも嫌だし」という言葉からも窺える。

2010年代の日本で、結婚式という「消耗品」に多額な費用を投じることはその後の生活にリスクを伴う。その不安から、なし婚が増え始めた。その結果、中間マージンなどをカットし健全な価格に適正価格化したスマートな結婚式、いわゆる「スマ婚」という新しい価格設定の結婚式が登場している（石神 2012）。H氏の指摘を裏付けする現象である。

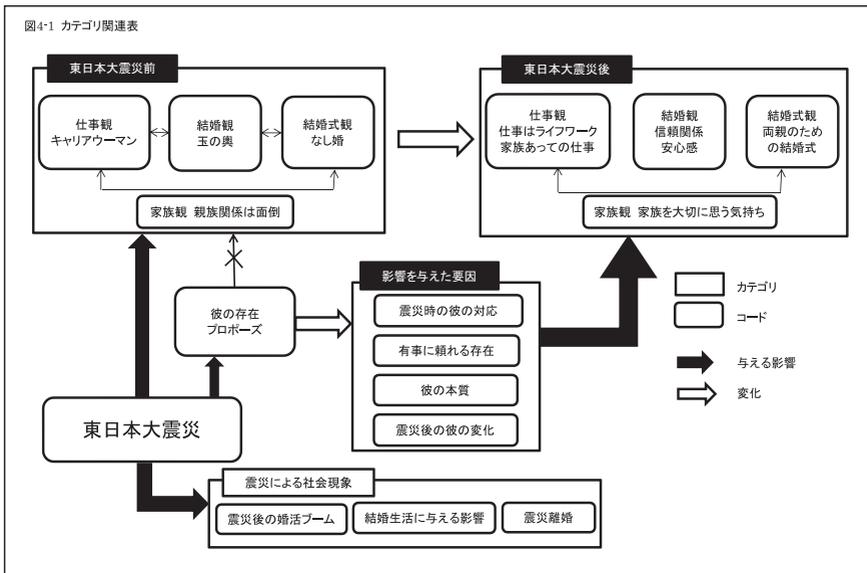
H氏は最後に「お金を借りてまで結婚式やるのかと思われるから、友達にも誰にも相談できないことだから、Z誌みたいな結婚情報誌に式場の情報だけじゃなくて、銀

行系のプライドルローンみたいな信用できる情報を載せてくれたらいいのって思います。そしたらみんな安心すると思います。結婚情報誌見て気持ちが踊って、ああ！ここで挙げたい、という人は元々お金があって、挙げるというのを決めている人だと思うんです」と話している。経済的な理由で結婚式を挙げるができないことに対して「むなしい」とも語っていたことから、実を言えば、両親の援助があったり、将来の生活に不安がなければ結婚式を挙げたいと思っているのかもしれない。

スマ婚のヒットには、経済的な理由で結婚式を諦めようとしていた人たちに受け入れられていることが背景にあり、それだけ多いということを示唆している。なし婚の理由として経済的事情があまり表面化していないのは、人生で最も重要な通過儀礼のひとつである婚礼において儀式を行いたくてもできないことへのジレンマや、H氏が言うように資金調達の方法を相談できずに諦めたことを人には言えないからであろう。

終章

表3-1のカテゴリ表を基に分析したカテゴリ関連図が図4-1である。H氏に「影響を与えた要因」をコアカテゴリとした結果、震災前後で変化した人生観を比較



して絆婚を決心した理由を浮き彫りにすることができた。

H氏については、震災後、婚約者との絆を再認識したという感覚よりも、震災という極限状態での彼の言動に信頼感と安心感を覚えたことが結婚を決意した大きな理由である。突き詰めれば、婚約者がH氏を大切に思うが故の行動で、それを絆ということもできるが、二人の気持ちの繋がりというよりも、「有事での頼りがい」という互いの信頼関係だということができる。

2011年5月17日付の日本経済新聞には、「恋愛以上の『安心』がほしい」とう記事が掲載されている（日本経済新聞 2011年5月17日夕刊）。震災婚の事例として、震災後結婚した遠距離恋愛のカップル、自分のことを気遣ってくれることにうれしさを感じ結婚を決意した女性、先行きの生活に不安を感じ経済的事情から結婚した女性、H氏のように震災後の恋人の言動を見て家族として意識し始めたことで決意した女性などを紹介している。結婚を決意したきっかけはみな震災であるが、その理由は実に様々である。

絆の重要性を再認識した人が結婚に至るといわれているが、絆だけではなく、信頼関係が構築されていることや、価値観に相違がないことなど、いくつかの要因がなければ一過性の結婚願望で終わってしまい、結婚には至らないのではないだろうか。

東日本大震災後の社会現象のひとつとして表面化した震災婚は、ブライダル業界では「絆婚」と一括りにして商材に利用しているが、事情は千差万別で、簡単には言い表せないといえるであろう。

一方で、震災を機に結婚生活における悩みに結論を出す人が増えたり、価値観の違いが浮き彫りになるなどして、震災離婚という社会現象も表面化した。リクルートブライダル総研が実施した夫婦関係調査2012によると、東日本大震災がもたらした夫婦の気持ちの変化として、男性は意識が家族に向かったが、女性は自分に向かっていることがわかった。妻は、従来夫や子供のために尽くしてきた反動から、震災をきっかけに、自分のために生きるという方向に意識が強まったことを示唆している。H氏の知人家族は、妻が自分に意識が向かった結果、夫と築いた家族ではなく、自分の実家家族に気持ちが向いてしまったといえるが、調査結果を裏付けする事例ということになる。このような男女の意識の差が、震災離婚の一要因と考えることができる。

本稿では、被災地のひとつである福島県在住の女性に聞き取り調査を行い、震災をきっかけに結婚を決意した震災婚について、震災後の意識や人生観の変化を中心に分析を試みた。震災後、様々な結婚や結婚生活に関する調査が行われてきたが、震災婚について被災地の当事者に聞き取り調査を実施することができ、分析できたことは意義のあることであったと考える。その結果、極限状態における貴重な経験談から、有意義な分析をすることができた。調査に協力していただいたH氏には、この場を借りて感謝申し上げたい。

今後も本稿を補完するような聞き取り調査を実施していきたいと考えている。

【参考文献】

- ・阿部正浩, 1999, 「経済変動と女性の結婚・出産・就業のタイミング」
- ・樋口美雄・岩田正美編『パネルデータからみた現代女性 結婚・出産・消費・貯蓄』東洋経済新報社, 25-65.
- ・石神賢介, 2012, 「なぜ『スマ婚』はヒットしたのか」.
- ・岩澤 美帆・三田 房美, 2005, 「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」(国立社会保障・人口問題研究所).
- ・白河桃子, 2011, 『震災婚』, ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- ・増田榮美, 2010, 「軽井沢におけるリゾートウェディング市場の成立と展開」, 信州大学大学院 経済・社会政策科学研究科修士学位論文
- ・宮坂靖子, 1997, 「夫婦の関係」, 石川実編, 『現代家族の社会学－脱制度化時代のファミリー・スタディーズ』, 有斐閣, 110-125.
- ・山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学』, 丸善.
- ・山田昌弘, 2000, 『パラサイト・シングル時代』, 筑摩書房.
- ・山田昌弘・白河桃子, 2008, 『『婚活』時代』, ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- ・内閣府, 「未婚男性の結婚と家族形成に関する意識について 非正社員に焦点を当てた実証分析」, 2013年2月.

- ・内閣府、「結婚・家族形成に関する調査」, 2011年.
- ・電通総研,「震災一カ月後の生活者意識」に関する調査, 2011年4月.
- ・リクルートブライダル総研,「夫婦関係調査2012」, 2012年.

【注】

- 1) 日本俗語辞典によると、東日本大震災により、それまで付き合いのあったカップルや友人関係にあった男女が関係（絆）を再認識し、籍を入れる、というような経緯での結婚を東日本大震災復興のキーワードともなった絆にちなんで絆婚と呼ぶ。また、震災の影響から家族という絆を求める人の婚活が積極的になったり、収入などの条件にとらわれず、本当に一緒にいたい人との絆婚を望む人（独身女性に多い）が増えたとされる。
- 2) 2007年11月5日号の『AERA』初出の言葉。山田昌弘が白河桃子取材を受けた時に提案した「結婚活動」の略語。よりよい結婚を目指して、合コンや見合い、自分磨きなど、積極的に活動すること（山田2008）。
- 3) 50歳時点で一度も結婚していない人の割合。1985年には男女とも4%だった。
- 4) 東日本大震災後の結婚や結婚生活についての調査研究は、震災直後や1年後に行われているものが多く、2年後の調査はまだあまり行われていない。リクルートブライダル総研の毎年実施されている調査報告にとどまっている。